

何故「論語とコンピュータ」を唱えるのか

他人の自由を尊重して人は本当に自由になる

「論語」に代表される古典思想とコンピュータとは、一見全く無関係です。何故情報通信技術、特にソフトウェアを語るのに「論語」の思想が重要との考えに至ったのか、動機を説明します。

まず「オープンソース」最初に唱えたのは誰か考えてみましょう。ご存知の方は少ないかもしれませんが。

オープンソースの考え方の多くはリチャード・ストールマン Richard M. Stallman 博士の発案です。マサチューセツ工科大学人工知能研究所に所属していた彼は、ソフトウェアを商売にしようとする動きが加速していた 1980 年代前半、当時の常識に反対し、ソースコードを公開し、技術情報を広く社会で共有することを説きました。彼はこれを free software と呼びました。その普及のためにフリーソフトウェア財団 (Free Software Foundation 略して FSF) を設立しました。

Ruby 言語の原作者まつもとゆきひろ氏は「1000 年後に歴史の教科書が書かれたらストールマン博士は必ず載るだろう、自分は記載されないだろう、(Linux カーネルの原作者) リーナスはどうかわからない」と評しています。

1998 年に英語の free は「無料」と解釈されて混乱を招くとして、free software の呼称を変えるべきだとの主張が出現します。代りの呼称として open-source software 日本で言うところの「オープンソース」が登場しました。(注1)

ストールマン博士はこの open source という新たな呼称に反対するようになります。「自由が一番大事なのに、それが十分尊重されていない」というのがその理由です。彼は世界各地で講演していますが、時に「ストールマン博士、あなたはオープンソースの創始者ですね。お会いできて光栄です」と挨拶してくる人がいます。そんな人に対して「自分はオープンソースには反対だ」と怒りを露わにします。皆様も将来どこかでお会いになる機会があるかもしれません。その際は是非注意して下さい。

ストールマン博士は open source に対して “free as in freedom” を合言葉に free は「無料」ではなく「自由」だと主張します。特に日本においては「自由なソフト」と呼ぶように支援者に指示しました。しかし FSF の公式サイト各文書日本語訳は修正されず「フリーソフトウェア」のままでした。(注2) 翻訳者が指示に従わなかったのですが、「フリー」が定着していて変更すべきでないと考えたのか、カタカナの方が格好が良いと感じていたのか、詳しい理由はわかりません。

当時私はストールマン博士の手伝いをしていて、いくつか困難な翻訳の課題に直面しました。「自由」という言葉でも問題は残ると考えていました。日本語の「自由」は「勝手」「わがまま」等の悪いニュアンスを含んでいるからです。「自由」とは人が所属組織の指示が及ばない仕事から離れた状態、生産的ではないと見做されます。

一方アメリカは「自由の国」を自負しています。「自由は良くない」と主張しようものなら合衆国全体を敵に回します。自由を国是とするに当たって、思想の蓄積があります。これが一番明確に表れるのが南北戦争です。

南北戦争はアメリカ合衆国の史上最大の国難で、この国が経験した戦争のうち最も犠牲が多いものでした。この難局に際し国を率いたエイブラハム・リンカーンは最も偉大な大統領とされています。南北戦争は本質的には奴隷制をめぐる争いでした。奴隷は言うまでもなく自由を剥奪された人です。

リンカーン大統領は就任前から奴隷制反対を唱えて活動していました。当然、自由について発言しています。さて、ここが大事なのですが、そのリンカーン大統領の自由についての言葉、日本の皆様はどれくらいご存知でしょうか？一つとして知らないと言う人が多いと思います。このように日本には「自由」という言葉はあっても、その基礎となる思想はアメリカ程には根を下ろしていません。そのような環境で「自由」を唱えても余り響かないものです。

それではアメリカでよく知られているリンカーン大統領の言葉を紹介しましょう。

Those who deny freedom to others deserve it not for themselves.

他人の自由を否定する者は自らそれを享受する資格が無い。

リンカーン大統領は白人です。奴隷は黒人です。大統領にとって奴隷は他人なのです。ここには「他人の自由を尊重する」という考えがあります。「自由」の「自」は「自分」を意味し、「他人のため」というのは思い付きにくいかもしれません。

他人の自由を尊重すると自分の行動、権利主張を自制するようになります。こうした他者への配慮は日本では伝統的に儒教思想の中で説かれ、その述語の多くは「論語」を始めとする経典に見られるものです。社会への配慮から権利主張を控えるのは「辞讓」（じじょう）と呼ばれます。「辞讓」は「孟子」の中に見える重要な言葉ですが、最近では聞かれなくなっているかもしれません。（注3）

孟子曰く「辞讓の心、礼の端（はじまり）なり」学校の授業は礼に始まり、礼に終わります。冠婚葬祭でも礼は重要です。夫婦が新生活を始める時婚礼が行われ、一緒に生活していた人が亡くなったら葬礼が行われます。教育と協力において礼は極めて重要です。

他の技術者への配慮からソースコードを秘匿しない、公開するというのはまさにこの辞讓です。ソースコードの公開は共に働く人に配慮して協力を促す、後輩の教育に資する目的があると思います。ソフトウェアに不具合を見つけてバグ報告をする人がいます。報告を受けた方は謙虚に誤りを認め「指摘してくれて有難う」「直してくれて有難う」と礼を交しながら改善改良のプロセスが進行します。

日本の人は「立派な教育者がリードし、メンバーに教育が行き届いている」「よく協力する」「礼を重んじる」と言えば、優秀な人々、品質の高い製品を生み出す組織を思い浮かべるものです。一般の人にここを伝え、理解してもらうのは大事だと思います。

さて自由についても少し触れておきます。自由は仕事以外のところにあると考えられがちですが、実は仕事の中にも自由はあります。その中で大切なのは「最適な手法を選ぶ自由」です。これが否定されている状態を考えてみましょう。スクリプト言語で行うべきところをc/c++でするよう強えられる、プログラムを一から書き直すべきを古いのを修正して実現するよう強えられる、サーバー側で処理すべきをクライアント側でやれと強えられる、このように不適切な手法では良い成果は期待できません。

現在、様々なプログラム言語が存在し、主要言語は多くのシステムに移植されていて利用可能です。不具合は少なく、技術情報も容易に入手できます。今日私達が手法を選ぶ自由を享受しているのは、辞讓と礼を重んじて来た先人達のおかげによるところが大きいと思います。

基幹ソフトウェアを人と人のつながりは世界的なものとなっています。ソースコードを通して、良き師匠、良き友人に出会う機会が生まれています。島根の方は初詣等で出雲大社に参拝される方が多いことでしょう。今度参拝される際は、このような縁についてもお考えになったらいかがでしょうか。男女の縁が典型的ですが、遠い人との縁は得難いもので、それでいて、協力関係が実現すると大きな力を発揮します。コンピュータの仕事をしていて、直近の課題、狭い専門領域を離れて広い視野で考えるよう心がければ、外国人、あるいは異分野のスペシャリスト等と遠いと思われた人との縁が生まれると思います。

2018年12月 漆畑晶

注1

1998年2月 Eric S. Raymond によって提唱された

Goodbye, "free software"; hello "open source"
<http://www.catb.org/esr/open-source.html>

注2

最近はこの点改善されていて「自由ソフトウェア」と表現されている。

<http://www.gnu.org/philosophy/philosophy.ja.html>

注3

「辞讓」は国語辞典、漢和辞典には掲載されていますが、最近の日本語入力かな漢字変換ソフトの辞書には登録されていないようです。

韓国では「辞讓」は「サヤン」と発音して現在も使われている言葉ですが、独特のニュアンスがあるようです。